

関東大震災被災者の情報獲得過程

田嶋 尚晴

災害大国日本では、今後発生するとされている南海トラフ地震や首都直下地震に対してハードとソフトでの対策が行われている。中でもソフト対策は誰でも取り組みやすく、一次災害が要因となって引き起こる二次災害を生き延びる上でも有効であると考えられる。しかし、大災害による通信途絶環境下において生き延びるための情報獲得という点は不十分であり、今後検討していく必要がある。

本研究では、関東大震災に着目した。関東大震災は、大正 12(1923)年 9 月 1 日 11 時 58 分に発生した地震によって引き起こされた災害で、流言飛語が頻繁に飛び交い、更なる混乱を招いたことで知られている。そこで、本研究では被災者の体験記を基に生き延びるための情報を人々が獲得した過程について明らかにすることを目的とした。

最近発見された関東大震災被災者の体験記である「東京大震災日記」を対象とし、生き延びるための情報獲得過程を明らかにするため、日時、場所、情報内容、情報源、キーワード、分類の項目で記述内容を調査した。本研究では、体験記の中でも断続的に記された一日目から三日目までの稿を対象とした。

体験記の記述から、情報獲得方法を受動的情報獲得、能動的情報獲得、偶発的情報獲得の三種類に類型化した。偶発的情報獲得が最も多く、能動的情報獲得は最も少なかったが、その前後に偶発的情報獲得が見られた。また、情報内容は生き延びるための情報には生き延びる行動の発動因・促進因となる火災の情報と生活の情報が挙げられる。火災の情報は一日目に集中しているのに対し、生活の情報は二日目に集中していた。

情報獲得方法と情報内容の傾向から、地震後三日間を職場からの帰宅、周囲の安全確保、避難生活の安定化、焼跡廻りの 4 つの情報獲得のフェーズに分類した。各フェーズにおける情報獲得方法と生き延びるための情報は、職場からの帰宅に火災の情報と偶発的情報獲得が集中しているのに対し、周囲の安全確保と避難生活の安定化では生活の情報と受動的獲得が集中していることが分かった。さらに生き延びる過程で獲得した情報量を本質的に明らかにするために経過時間と体験記の文字数から獲得した情報量の密度を求めたところ、各フェーズの一時間あたりの情報量は職場からの帰宅が最も多く、周囲の安全確保と避難生活の安定化では少ないことが明らかになった。

情報獲得方法と情報量の密度から火災の情報は偶発的に獲得しており、時間に対する情報量は多く、対して生活の情報は受動的に獲得しており、時間に対する情報量は少ないことが明らかになった。このことから受動的情報獲得と偶発的情報獲得における二つの情報獲得過程では獲得できる情報の内容と情報量が異なるといえる。

(指導教員 白井 哲哉)